

自分たちが生きるための時間を過ごせてるなって感

じたのは大きかったね

語り手 辻本 真樹(高校一期生 不動産業) 聞き手 奥村 愛加

立命館守山高等学校一期生として紡いだ歴史

―それではよろしくお願いいたします。何個か質問を持ってこさせてくださいました。まず、この一期生っていうことで、あまり学校の名前すらも知名度が低くわからない中、なぜこの学校を選ばれたのですか。

生まれも育ちも隣の野洲で。中学校卒業までは野洲にいました。立命館を選んだ理由の一つは、家から近い距離に立命館ができるってこと。

「これおもしろいじゃん」っていうので、決め手になった。また、中学校一年生の頃から、心理学に興味があつて。今、会社の代表をやらしてもらってるけど、祖父の会社で、ゆくゆくはこの会社の代表になるんやろうなっていうのが、中学生生活で見えてて。人間って最終人と人やから、心理学勉強しておいて、相手のことがわかったら、人生生きていく中で「絶対俺将来的に有利じゃん」と思ったね。調べたら、立命館っていうところが心理学の勉強ができるっていうのがあつて、「立命館いいじゃん。」「近いじゃん。」「大学受験ないじゃん。」この三つっていうのが結構大きい決め手というか。

―心理学に興味を持ったきっかけっていうのは……。

僕の祖父の兄弟で、東京で臨床心理士の資格を取得してカウンセリシグの先生してる人がいはって、話を聞けば聞くほど心理学って面白いなと思って。僕も結局は文学部の心理学科卒業したけど、人の心理が学問

でわかるっていうのは、やっぱりすごい。人の心って公式なんてあるはずないと思ってたけど、学問とか見てたら、それなりのルールはあるのよね。人の動きとか考えとかって。これを知れたら面白いなっていうのが一番大きかったかな。

―そうなんですね。アメリカンフットボール(以下アメフト)部に入られてたということなんですけど、アメフト部に入った理由とかきつかけっていうのはあつたりしますか。

僕自身、中三までずっと水泳をやつてて。結構結果を残せるようなプレーヤーやつてん。高校もやろうかなと思つてんだけど、「学校にプールないじゃん!」つてなつてん。でも、部活は入りましようみたいな空気がなつてたから。サッカーとかバスケットかあつたけど、高校でそこに入る人らつて、小学校でスクールやつて、中学校で部活バリバリやつて、高校でも「まだちよつと頑張ろうぜ」みたいな人が多いイメージがして、「楽しめへんな」と思つてん。それで誰もやつたことないやつで、同時にスタートできるんつてなんやろと思つたら、ハンドボールとアメフトやつて。どっちにするつてなつた時に、だいぶ中学時代から喧嘩っ早いというか、ちよつと問題を起こしてたような人間やつたから、合法的に喧嘩できるアメフトを選んだよね(辻本さんの私見です)。笛が鳴つて、鳴り終わるまでは別に危険な行為以外やつたら何してもいいルールやから。血気盛んな俺にはちよつとええと思つて。同期もやつたことないメンバーが揃つてるから、みんな同じラインに立つて、一緒に進めるつていうのが面白そうやなと思つて。それで入ったのがきつかけかな。あとは、立命つて言ったらパンサーズ。アメフトっていうのは僕の代から有名やつたから。それはそれで面白い勉強できるんちゃうかなと思つて。

—そうなんですか。アメフト部も学校ができたのと同時にスタートしたみたいなの？

—そうそう。だから、アメフト部の守山パンサーズも二期生が俺ら。

—なるほど、でもそれで創部二年にして……。

—そうやね。冬の新人戦は多分記録残ってると思うけど、滋賀県制覇したからね。

—それは、本当にすごいと思うんですけど。

俺、今思ってもすごいと思うよ。

—本当にすごいと思います。ほぼ全員がゼロスタートでどうやってそんな高い志でチーム一丸となれたんですか。

—なんでなんやろうな。中に経験者が二人いて。中学校までずっとアメフトやってる人間とタッチフット(アメフトのルールの中で、タックルをタッチに変えたもの)やってる人間がいて、そこを軸に色々教えてもらったりした。

—なんで仲良くなったかっていうと、みんなやったことないから、試行錯誤して、ああでもないこうでもないで、しんどい思いもみんな一緒にし、めっちゃくちや負けるし、もちろん一年目なんて、ルールもわからへんし、体もできてへんしで、相手は二、三年の先輩方が突っ込んでくるわけやから、理不尽な環境にいたわけやね。でも、そういう経験を共にして、一歩ずつ点数を取る楽しさがわかって来て、アメフトにのめり込んでいったというか。やめたやつ、いいひんのちゃうかな。みんな仲良かったというか、楽しかったんやろうね、純粋にアメフトが。

—二年生の春から八反先生に来ていただいて、そこから、チーム方針とかやり方がすごく統一されたというか。今まで自分たちで考えて、大学のコーチとかに教えてもらってやってたものが、筋が通ったというか。

八反先生に来ていただいてからはガラッと変わったね。

—やりやすくなったってことですか？

—そう。アメフトってめっちゃくちややつばしんどのよね。夏やってたらマジで倒れる。だからこそ、時間にめっちゃくちや厳しい。一個一個の練習が、五分ぐらいで区切られてるのよ。「オンオフの切り替えが大事」って言われてん。革新やった。八反先生の練習メニューの組み方で、「休む時は休め、だらだらやるな」みたいなのは僕は楽しかったというか。成績が残るというか、集中して練習に取り組むから怪我も少ない、体力もつく、無駄な事をしないから体力も残る。次第に試合にも勝てるようになっていったね。その時一個ギアが噛み合ったっていうのはあったね。

—なんか、話聞いてほんとに尊敬だなと思います。やっぱり勝った時が一番嬉しかったですか？

—めっちゃくちや嬉しいよ。ずっと負けてたからね。やっぱりその中でもチーム全員でこう成果を残すっていうのは大きいよね。僕の人生の中で、水泳競技って個人種目やから、本気でやっても、怠けたとしても、返ってくるのは自分の結果で。だから、あんまり組織で評価されるというか、成果を掴むっていうのはなかった。それがやっぱりチーム一丸でね、プレイヤー、マネージャー、コーチとか先生入れたら三十人ぐらいになるけど、何か一個、大きい価値というわかりやすいものを得た時はすごい嬉しかったよね。

—なんかイベントとかで印象に残ってることとかってあったりしますか。

—毎日がイベントみたいな感じやったね。多分今ではないような取り組みもあったと思う。やっぱり二年生になっても僕らは一期生やから、二

年生のカリキュラムも先生たちもやったことないやろうし、毎日が新鮮やったというか。僕らは、自分たちが生きるための時間を過ごせてるなっていうのを感じたのは大きかったね。一期生は同じこと経験をした先輩方は当たり前やけどいいひんから、学校も施策的にいろんなことやってはったと思うし、ほんまに毎日が刺激的やったね。体育祭、文化祭ももちろん面白かったよ。面白かったけど、それ以上に毎日の出来事の方が刺激的やったね。

―後輩が入ってきた時の変化って何かあったんですか？

後輩が入ってきたくれたのは嬉しかったね。僕たちの歴史というか、後ろにやっぱ人が入ってきたくれるぐらい魅力的な学校なんやというか。僕らの歴史を繋いでくれるんやろうな。ちゃんと僕らがやってきたことって世間に認められて、良い学校になってるから、どんどん人が集まってきたくてくれるんやなっていうのはすごい嬉しいね。

アルゴリズム思考―大学時代に答え合わせ―

―大学ではどんなことされてたんですか？

大学はダブルダッチやね。四年間ずっとやったかな。朝から晩まで縄跳びしてたね。

―ダブルダッチをするきっかけっていうのはなんだったんですか？

ダンスが好きで、もともと。高三の時の体育の選択授業の中にあつたダンスを友達とやってみたらめっちゃ楽しかったん。やっぱダンス楽しいなって。大学のアメフト、パンサーズは強すぎる。その当時僕も首の骨もずれてたし、色んなところ怪我してたから、もう選手としてはあかんって思ってた。

大学は絶対ダンスやりたいなと思ってんだけど、出会ったのが、ダンス

とアクロバットを融合させて、音楽に乗りながら、バチバチいけるダブルダッチをしてる先輩の姿。先輩との出会いは大きかった。ダブルダッチはダンスもできる、アクロバットもできる。そしてマイナースポーツという点。多分昔から好きなんやろうね。誰もやったことないとか、あんまり知られてないとか。歴史を作りたいみたいな気持ちが一層強かったのかな。で、ダブルダッチにのめり込んでいったって感じかな。

マイナースポーツをもっとメジャーにしていきたいかったっていうのもあつたし、やっぱマイナースポーツが好きっていう。今までマイナースポーツで生きてきたから今更メジャースポーツはできひんね。そこで努力するのが大変やろうなっていう。それやったら、みんな知らんところ、ちょっと頑張ったら成果が出るというかね。評価される、認めてもらえるぐらいの方が楽しいかなと思って。

―大学時代はアルバイトとかはされてましたか？

してたしてた。マクドナルドで深夜帯をずっと働いてて、バイトはそこだけやった。

―なんでマクドナルドにしようと思ったんですか。

これもまた下宿先が近かった。一回測ったら家から店まで八十六歩で来てる。仕事できるようになったら結構頼りにされてた。「ちょっと辻本、裏の在庫整理して」って。冷凍庫めっちゃ整理しなあかんねん。下手な人やると入りきらへんし。金閣寺のマクドナルドやってんだけど、当時全国のマクドナルドの中でも売り上げ三位やってん。

―めっちゃくちゃ客が来るってことですよ。

そう。観光客、修学旅行生、学生がもうひっきりなしに来るから。こういう整理ができる人間いいひんから、結構呼び出された。「今日の夜の子、ちよっと新人やから一緒に見てあげて」みたいな。そういうのは

任されてたし嬉しかったね。

—すごいです。そんなに仕事ができるようになったきっかけみたいなことはあるんですか。

生活はもちろんあったけど、学費も全部、俺、奨学金やったし。家賃とか食費も自分のバイト代。生きていくために働かなあかんってのもあった。そのために真剣に働いてたら、やっぱりスキルは上がっていきし。マクドナルドって、やっぱり評価制度がしっかりしてるから、実力が上がっていける。認められるっていうのが、わかりやすかったから、どんどん上に上っていったって感じかな。やりがいはあるたよね。人生の先輩からいえる事。「マックは一回働いた方がいい。」あれは、仕事がちやくちやできるようになる。

—忙しいからってことですか。

高品質な商品を短時間で提供するっていう難しさを世界レベルでやり続けてんの。これは僕の仕事のあり方にも繋がるよね。短期間で高品質な商品を納品をするためには、それぞれの工程があるのよ。それをできるだけ明確化して、作業手順を細分化する。自分でやるか、人に振るか。振った場合はどういう風に仕組み化して報告を返してもらうのかとか、やっぱり大きな会社はやり方がすごいシステムチックになってる。そこを踏まえた上で社会に出ることってかなりの差やから。

これは元に戻ると、多分高二でやったアルゴリズム(問題を解く手順や方法、作業の順序を論理的に整理すること)の授業からスタートやと思う。仕事するにおいても、生きるにおいても、感覚じゃなくて、「なんでこれがこうなってるのか」っていうのは、今の仕事もそうやし、生き方としてもすごく大事にしてる。経営者って新しいものを作り続けていかなあかん。そういった時に、やっぱり新しいものを作ろうと思うと、

何に基づいてやるのか。ビジネスモデルも、どういうデータに基づいて、どういう風な仕組みでやるか。このアルゴリズムってすごい大事な考え方。人の考え方がわかるってすごい大事かな。心理学も歴史を重ねて知見があるから、やっぱりそれを体系化してルール化したり定義づけていったら、それなりの成果は出る。相手が求める条件や潜在ニーズを引き出すために、身なりとか表情とかから汲み取る。商談の中でも、やっぱりそこらへんは理系の考えに則ってるんよね。

人と町の未来をつなぐ今

—大学時代の学びから、最終的には家を引き継いだのですか？

そうやね。家業を継ぐことは決めてたって感じかな。決まってたというよりは、自分でこの人生を歩むって決めて、バックキャストینگ(逆算)して生きてる。

僕は「五十歳で引退したい」と思ってた。五十でFIRE(働かなくても生活できるだけの資産や収入を持ち、早期に仕事から自由になる生き方)して、自分が何不自由ないお金とか状況を作るためには、自分で創業すると多分無理やと思った。じゃあ、今ある資源を活かすってなったら、祖父の会社に就職して、トップ上り詰めて、ビジネスをもっと展開して、収入とか権利収入だけで生きていたら、俺ハッピーやなって思った。これが中一。中一のときには、もう将来を逆算して考えてた。五十歳で引退したいと思ってる、そこから四十歳で代表、三十歳で成果残して、二十五歳、二十歳……ってどんどん細分化して。十三歳の真樹少年は四十歳で社長になると思ってたけど、結果三十二歳で代表になったね。目標を定めて、そこからプロット切って(目標達成までの行動計画を年齢やステップごとに区切って整理すること)やっていくと案外早く

いった。その中で、最終そこまで数字を上げるためには人のことを理解しなアカンっていうので、心理学っていう道を選んで。

不動産業の知識なんて、正直五十歳、六十歳でいってもまだまだ勉強しなアカンこといっぱいあるから、その手先のノウハウじゃなくて、本質の人間の部分を理解したら、なんでも通用できる。不動産屋にならなくても。と思ったから心理学を選んだっていうのはあるよね。

—中一かあ。そんな前から逆算してたんですね。すごいです。

ほんまにね。そこからどこもぶれてへんと思う。現在は、自分の人生設計より早く来てるから、僕も四十歳まであと二つぐらい会社を作って、ホールディングス(複数の会社をまとめて経営・管理する会社のこと)を作って、あと十年でそれを伸ばしていく。

守山はスタートアップ支援(新しい事業や会社を立ち上げる人やチームをサポートすること)やってはるし、野洲市でもそういった形で企業が生まれるような仕組みの不動産をやっていたい。土地の提供で関わりつつ、町が盛り上がっていったら人が集まっていって、そこにビジネスが生まれて、そこに不動産が必要になるから不動産を提供して。そういう循環をやったら、僕は多分五十歳までには引退できてるかなと思って。

—五十歳に引退っていうのは絶対にぶれない軸？

そこ、ぶれたらだらだらいきそうというか。今でさえ、いろんなことやってんのに、このまま働いたら死ぬんちゃうかなと思って。よく言われてるのが、「辻本くんマグロやね」とか言われてる。止まったことがないから、なんか止まるのが怖いし、役受けて(役職を引き受けて)、いろんな仕事して、いろんなとこ顔出してっていうのをやり続けてるから、これは五十歳以上、六十歳までこれ続けてたら、家庭もそうやけ

ど、多分身が持たへんやろなって。やし、五十歳ってもう言い続ける。絶対引退するみたいな。

—今までで苦労したことはありますか。

今もめちゃくちゃ苦労してるんやけど、考え方とか行動のスピード感が周りとか合わないことが多くて凄く違和感がある。気持ち悪いってのかな？ いろんなことの並列思考というか、いろんなことばーっと同時並行で走らせて、これとこれ繋がるから、これをこうしてこういうビジネスにしようとか、こういう風な仕組み作ろうっていうのはすぐ思い浮かぶねん。

全部自分でやってしまうことはできる。けどそれって組織として考えたら正解ではなくて。これは経営者のよくある悩みの一つで、やりたいことと出来ることのこの溝、ギャップがすごいしんどいかな。僕の中では全部繋がってんねん。アルゴリズムじゃないけど、こういう風なストーリーでプロット切って、マイルストーン(目標達成までの途中の節目や重要な段階のこと)ガーって頭の中でつなげておろしてるつもりやねんけど、それでもまだ現場には少し早いスピード感。なので、もう一回持ち帰って、こう組み替えてとかっていう行程はすごくしんどいかな。—そのスキルっていうのは、さっき仰っていたアルゴリズムを学んだ時からですか？

あとアメフトかな。アメフトって、全てが並列で動いて、もちろんプレイは決まってるけど、イレギュラーは絶対起こんのよ。当たり前やけど。そんな時に瞬時に判断して、全員の動きを理解した上で、自分はどうか動かかっていうのを決めなアカンポジションがあってね。それがラインバックカーって言われるディフェンスのポジションで、守備の司令塔って言われてる。この瞬時のスピードっていうのは、やっぱりアメフトで鍛

えられてる。瞬時に判断して、決断する。自分だけで動いてたらあかんからっていうのは、すごく経験値としてでかいかな。

—自分の最終的な理想像として、うん、五十歳までにどうなりたいとかってあったりするんですか。

五十歳までは、死ぬほど働くと思う。地域のために、社員のために。僕は、生まれも育ちも野洲やから野洲に恩返しやと思って仕事してる。野洲の町を、「だれしもが好きになるまちをつくる」これがうちの経営理念で、このためにうちの会社は動いてる。

不動産の力を通してって一切名刺に書いてないのはそこで、町づくりをしようと思ってる。だから五十歳までは真剣に会社、社会課題に対して必要なものを作り続ける。だから五十歳までにホールディングスを作りたい。四十歳までには二社ぐらい作りたいと思ってるから、五十歳までには七社か八社ぐらい作って、そのホールディングスのオーナーになって引退してたいかな。

—最終的にどんな人生歩みたいとかってありますか。

ありがとうって言われて死にたいね。周りに。家族も含めて、友達とか関わった人全てに、「あんたはようやってくれたな」って良い意味で言われたい。よくこの街のために貢献してくれたなって言われて、惜しまれながらとか、感謝されながら死にたいね。いろんな人に見送りたい。僕のこの意志がいろんな人に伝わってほしい。一人の辻本真樹という人間の生き方が、誰かの心や行動に火を付けて、自分の生まれ育った町とか、今お世話になってる町をより良くしたいなって思ってくれたら俺はそれでいい。死ぬときにはそういう状態をどんどん作っておきたいかな。

—めっちゃいい話が聞けて本当によかったです。終わります。

よかったよかった、

—ありがとうございました。

いえいえ、こんな話でいいんやったら。

—もう完璧です。本当にありがとうございました。

【感想】

辻本さんの話を伺い、一つひとつのエピソードから「目標に向かって全力で挑む姿勢」が肌で伝わってきました。この話を聞いて、私は胸が熱くなり、自分も目標を明確にして逆算しながら、全力で行動したいと強く思いました。どんな経験も無駄にせず、自分のスキルや価値を磨き、周囲と力を合わせて大きな成果を生み出す、そんな生き方を、私も今日から実践していきたいです。



右：語り手 辻本 真樹さん
左：聞き手 奥村 愛加